

学生の研究分野に対する興味 —東京農大森林総合科学科の学生を対象として—

大鹿めぐみ・佐藤孝吉（東農大）・箕輪光博（大日本山林会）

I はじめに

大学生にとって専攻実験や卒業論文にかかわる所属研究室の選択は、自らの興味、やりたい研究内容、卒業後の進路などに関連した重要なことである。1990年代以前の農学部林学科では、森林資源利用や林業・林産業関連の教育内容が多かったが、2000年以降、環境や情報など総合的な分野へと展開してきた。東京農業大学森林総合科学科（旧林学科、以下農大森林と略する）は、森林に関連する自然科学から社会科学に至る様々な分野の講義が開講されている点で、他学科に類をみない特徴である。

生徒等が受験する時点では、漠然と森林などに興味を持っているが、講義を受けながら具体的な内容を勉強し、それぞれの興味の方向性を見いだすことになると思われる。そして、2年次後半に研究室選択を行い、3年次から所属研究室にわかれて深化した研究を行うことになっている。研究室選択は、個々の興味を主とし、受け入れ研究室の事情等も加味され決定される。

学生の研究分野に対する興味を把握することは、林業や林産業の低迷、このような状況における講義などの方向性や少子化傾向のもとで学生数を確保するなどの経営的な側面からも、重要ではないかと考えた。そこで、本報告では、農大森林の学生が、学年が進むにつれ興味のある研究室がどのように変化するかについて、アンケート調査を実施することにした。

II 調査内容と方法

農大森林は、1947年千葉県茂原市で林学科を創設し、1957年現在の東京都世田谷区に移転、2000年に森林総合科学科に名称を変更し、2008年で61年の歴史を持つ（1, 3）。①森林環境保全分野（森林生態学研究室：生態、治山・緑化学研究室：治緑）、②森林資源生産分野（造林学研究室：造林、林業工学研究室：林工）、③森林資源利用分野（木材工学研究室：木工、林産化学研究室：林化）、④森林資源情報分野（森林経営学研究室：経営、森林政策学研究室：政策）の4分野8研究室がある（かっこ内に本論での省略形を示

した）。各分野の開講科目数（表-1）をみると、研究室選択に影響のある1, 2年次の科目は、共通の科目が多くなっており、各分野の科目数は5~8科目で森林資源生産分野が多く、森林文化情報分野が少ない（2）。

学生に対するアンケートは、2008年5月に必修科目の講義時間の開始前に実施した。回答者数は366名（回答率70.2%）で、学年ごとに116~129名であった。アンケート内容は、1, 2年生は興味のある研究室（複数回答で回答）、3年生は所属研究室を、さらに性別、林業体験、木材利用に対する意識調査を同時に実施した。

III 調査結果

学年別の興味ある研究室は（表-2）、1年次には、森林環境保全分野の生態・治緑が多く、両研究室で全体の60%を占め、反対に森林資源利用分野は木工・林化の両研究室で5%にも満たなかった。3年次には、各研究室の全体に対する割合がそれぞれ6~17%と差が少なくなってきていた。つまり、林業・林産業の特徴を持つ林工、木工、林化、経営は学年が進むに連れて興味のある学生が多くなっていった。男女別に比較すると、林工では男子学生の増加の割合が強く、木工や林化は女子学生の増加割合が高かった。政策は学年を通じて変化が少なかった。

その理由を考慮するものとして「林業体験の時期」を「大学」と回答した学生（表-2）をみると、学年ごとに（14.6%, 39.1%, 77.1%）増加していることがわかった。また、体験の種類を「実習や講義」と回答した学生は、70~80%と大きかったことから、大学での教育が研究分野の興味に強く影響していると考えられた。

研究室ごとに比較すると、1年次には生態、治緑、林化、経営は体験の時期が早いと回答されたが、林工、木工は2年次に高くなっていった。つまり、林業や林産業など受験当時に興味をもっているとは、異なった体験が影響していると考えられた。体験の種類が「実習

Megumi OSHIKA, Takayoshi SATO, (Tokyo Univ. of Agric., Setagaya, Tokyo 156-8502) Mitsuhiko MINOWA (The Forestry Association of Japan, Akasaka, Minato, Tokyo 107-0052, Japan)

Interest of students on research and laboratory; In Dept. Forest Science, Tokyo Univ. of Agric.

や講義」との回答は、木工や林化が高く、生態、政策が低くなっていた。

IV まとめおよび考察

大学生の研究分野に対する興味は、1年次には森林環境保全分野や森林資源生産分野の割合が多く、学年が進むにしたがい森林資源利用分野へと多様化してきていた。アンケート結果によるとその理由は、大学での実習や講義に影響されたと考えられ、男女によって多少の差があることが分かった。したがって、地域環境における森林の重要性はメディアなどの情報が受験生に影響を与えている。林業や林産業に対しては、大学での体験や情報提供などにより興味が深まった。林業・林産業に興味を持つためには、体験や情報提供が効果的であると考えた。

引用文献

(1) 杉浦孝蔵 (1997) 実学としての林学教育を目指して—東京農大林学科五十年の歩み—, 山林1354:

15-24.

(2) 東京農業大学 (2005) 学生生活ハンドブック : 106-136.

(3) 東京農業大学農学部林学科 (1996) 林学科創設50周年記念誌 : 31-38.

表-1 農大森林の分野別開講科目の状況

分野	科目数			
	1	2	3	4
森林環境保全	3	3	9	2
森林資源生産	2	4	4	1
森林資源利用	3	5	6	1
森林文化情報	2	3	5	2
共通の科目*	24	10	5	1
学生数	164	177	180	189
アンケート回答数	129	116	121	-
回答%	78.7	65.5	67.2	-

*共通の科目は、学部共通、共通、総合化の科目

表-2 学年別興味のある研究室

学年	分野 研究室	森林環境保全分野		森林資源生産分野		森林資源利用分野		森林文化情報分野		合計 人
		生態 人(%)	治緑 人(%)	造林 人(%)	林工 人(%)	木工 人(%)	林化 人(%)	経営 人(%)	政策 人(%)	
全体	1	76 (33.6)	65 (28.8)	26 (11.0)	1 (0.4)	3 (1.3)	6 (2.7)	15 (6.6)	34 (15.0)	226
	2	41 (18.8)	53 (24.3)	51 (23.4)	10 (4.6)	7 (3.2)	9 (4.1)	22 (10.1)	25 (11.5)	218
	3	19 (16.1)	20 (16.9)	20 (16.9)	8 (6.8)	12 (10.2)	7 (5.9)	15 (12.7)	17 (14.4)	118
男	1	42 (33.6)	35 (28.0)	10 (8.0)	1 (0.8)	3 (2.4)	4 (3.2)	9 (7.2)	21 (16.8)	125
	2	27 (18.8)	31 (21.5)	27 (18.8)	8 (5.6)	6 (4.2)	9 (6.3)	18 (12.5)	18 (12.5)	144
	3	12 (14.1)	15 (17.6)	11 (12.9)	8 (9.4)	7 (8.2)	7 (8.2)	14 (16.5)	11 (12.9)	85
女	1	34 (33.7)	30 (29.7)	16 (15.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.0)	6 (5.9)	13 (12.9)	101
	2	14 (16.9)	22 (26.5)	24 (28.9)	2 (2.4)	1 (1.2)	9 (10.8)	4 (4.8)	7 (8.4)	83
	3	7 (17.5)	5 (12.5)	9 (22.5)	0 (0.0)	5 (12.5)	7 (17.5)	1 (2.5)	6 (15.0)	40

1,2年生の人数は、複数回答の延べ人数、%は全体人数に対する割合である。

表-3 研究室別林業体験の時期と種類

学年	分野 研究室	森林環境保全分野		森林資源生産分野		森林資源利用分野		森林文化情報分野		合計 人
		生態 人 (%)	治緑 人 (%)	造林 人 (%)	林工 人 (%)	木工 人 (%)	林化 人 (%)	経営 人 (%)	政策 人 (%)	
体験の時期 (大学)	1	13 (17.1)	14 (21.5)	1 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (33.3)	4 (26.7)	5 (14.7)	(14.6)
	2	16 (39.0)	20 (37.7)	18 (35.3)	6 (60.0)	3 (42.9)	3 (33.3)	8 (36.4)	7 (28.0)	(39.1)
	3	13 (68.4)	18 (90.0)	16 (80.0)	3 (37.5)	11 (91.7)	6 (85.7)	13 (86.7)	13 (76.5)	(77.1)
体験の種類 (実習や講義)	1	52 (68.4)	46 (70.8)	18 (69.2)	1 (100)	3 (100)	5 (83.3)	10 (66.7)	23 (67.6)	(78.3)
	2	28 (68.3)	39 (73.6)	40 (78.4)	7 (70.0)	4 (57.1)	6 (66.7)	15 (68.2)	17 (68.0)	(68.8)
	3	14 (73.7)	18 (90.0)	16 (80.0)	4 (50.0)	11 (91.7)	7 (100)	14 (93.3)	13 (76.5)	(81.9)

人数は回答者の延べ人数、%は回答者に対する割合である。